

中原遺跡

大崎南土地改良区は場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

1990

津山市教育委員会

序

中原遺跡は土地改良総合整備事業に伴って発掘調査された遺跡であります。

中原遺跡の位置する津山市中原及び金井地区には大きな平野部があり、水田耕作には恵まれた土地であります。昔と今とでは時間を越えてそのような価値観が往々にして一致する場合があります。昔の我々の祖先たちもやはりこの地で水田を耕作していたに違いありません。

さて、中原遺跡は当初より土器片等が拾われていることから、遺跡の存在を考えられていたところであります。今回初めて発掘調査が行われました。その結果、かなり広い範囲に遺跡が広がっていることが確認されました。また、遺跡も弥生時代中期から中世・近世にいたる複合遺跡であることも分かりました。

このように、発掘調査によって得られる情報量の蓄積は、非常に重要なことであると思います。いずれにせよこうして1遺跡の1部を記録保存し、大部分については現状保存できたことは、この上ない喜びであります。

ここに、ささやかではございますが報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をお願いです。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大な御協力をいただいた大崎南土地改良区、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月31日

津山市教育委員会

教育長 萩原 賢二

目 次

I. 立地と周辺の遺跡	1
II. 調査経過	2
1. 調査に至る経過	2
2. 発掘調査の経過	2
III. 調査体制	3
IV. 調査の記録	4
1. 第1地点	4
2. 第2地点	14
3. 第3地点	16
4. 第4地点	20
5. 第5地点	21
V. まとめ	24

例 言

1. 本書は大崎南土地改良区の実施する構造改善事業に伴って調査を行った中原遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査経費は、その75%を大崎南土地改良区が負担し、残りの25%を国庫補助事業とした。
1. 発掘調査は津山市教育委員会文化課主事保田義治が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は磁北である。
1. 本書では遺構配置図等に遺構の略称を用いた。略称名は次のとおりである。
S H : 住居址、S B : 建物址、S K : 土壙、S G : 土壙墓、S A : 杭列、S X : 不明土壙
1. 本書第2図に使用した「中原遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行2万5千分の1(津山東部)を複製したものである。
1. 遺構の実測は保田、埋蔵文化財調査員木村祐子が担当した。また、遺物の実測、遺構・遺物のトレースは保田、木村、埋蔵文化財整理員野上恭子が担当した。
1. 本書の執筆及び編集は保田が担当した。
1. 出土遺物及び図面は津山市二宮埋蔵文化財整理事務所に保管している。

I. 立地の周辺の遺跡

中原遺跡は岡山県津山市中原469他に所在する。

岡山三大河川の1つ吉井川は中国山地の上斎原村にその源を発し、津山盆地で東へ進路を変える。盆地の東岸で支流の加茂川と合流して再び南下し、瀬戸内海へそいでゆく。その合流点には和気山から北へ向かって、幾本もの丘陵が派生している。中原遺跡はその丘陵の最も北東部のものに位置する。

中原遺跡はその丘陵の西斜面部分にあたり、さらに細かな尾根が北西方向へ派生している。調査区には3本の小丘陵が確認され、第1・2地点が最も北側の、第3・4地点が中の、そして第5地点が最も南側の小丘陵上に位置している。

中原遺跡周辺は津山市のなかでも最も遺跡の密度が高いところの1つである。最も古い時期のものは、崩レ塚古墳の下層から縄文時代前期の土器が纏群とともに出土している。また、金井から瓜生原にかけての丘陵上にはかなりの数の「陥し穴」土壙が確認されている。弥生時代には中期中葉頃から丘陵上に大きな集落が営まれるようになる。西吉田遺跡、一貫西遺跡、金井別所遺跡、深田河内遺跡等である。弥生時代後期になども、一貫東遺跡、大畠遺跡、小原遺跡のように依然大集落が形成されている。ここで注目されるのは中期と後期では同一丘陵上に複合して立地しない点である。古墳時代になると4世紀の日上天王山古墳をはじめに多くの古墳・古墳群が造られるようになる。5世紀の一貫東古墳群・6世紀初頭の茶山古墳群等が認められる。6世紀の後半には横穴式石室の古墳が造営される。クズレ塚古墳は津山市の中でも最大規模の陶棺古墳であり、隣の柳谷古墳からは銀象嵌頭椎大刀の柄頭が出土している。また、金井古墳群・積木古墳群等の古墳群も周辺の丘陵上に立地する。さらに周辺には製鉄に関する遺構等も多く検出されており、鉄の産地の1つであったことを示唆させる。奈良時代にはいると、この地域に美作国分寺及び美作国分尼寺が造営されていることから、この地域が古代において重要なところであったことを窺わせるものである。



第1図 中原遺跡位置図

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 中原遺跡 | 13. 崩レ塚遺跡 |
| 2. 金井古墳群 | 14. 柳谷古墳 |
| 3. 桧木古墳群 | 15. 大畠遺跡 |
| 4. 一貫東遺跡 | 16. 小原遺跡 |
| 5. 一貫西遺跡 | 17. 隠里古墳 |
| 6. 茶山古墳群 | 18. 長歎山古墳群 |
| 7. 西吉田遺跡 | 19. 美作国分寺 |
| 8. 深田河内遺跡 | 20. 飯塚古墳 |
| 9. 別所谷遺跡 | 21. 美作国分尼寺 |
| 10. 金井別所遺跡 | 22. 日上天王山古墳 |
| 11. 崩レ塚古墳群 | 23. 日上和田古墳 |
| 12. クズレ塚古墳 | |



第2図 中原遺跡と周辺主要遺跡分布図 (S=1:50,000)

II. 調査経過

1. 調査に至る経過

津山市金井、中原一帯において土地改良総合整備事業が計画され、昭和63年8月22日付で大崎南土地改良区理事長本山明から、文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。それにより、昭和63年10月24日から平成元年2月3日まで、岡山県古代吉備文化財センターが当該地の確認調査を行った。その結果、中原地区はかなり広い範囲について包含層及び遺構が遺存していることが明かとなった。(註1)

それを受け、平成2年度工事着工分については、平成元年度に発掘調査を行う協議がなされ、平成元年9月25日付で、大崎南土地改良区理事長本山明から文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。それに伴い、津市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官に提出した。

また、経費については「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」の覚え書きに基づき、農家負担分の、25%については国庫補助事業とした。

2. 発掘調査の経過

調査区の設定は次のように行った。まず、第1地点及び第2地点を貫通する南北の軸を磁北を基準に設定した。これを15ラインとした。そのライン上で第1地点の最も北の杭のある東西ラインをBラインとした。南北軸は西から1~15を、東西軸は北からA~Zを付け、北西杭の名称をそのグリッドの名称とした。(第3図)

発掘調査は平成元年11月6日に着手した。バックホーを借り上げ、表土剥を行った。発掘作

業員は11月7日から動員し、第1～4地点の清掃から取りかかった。11月15日から第1地点の遺構調査にかかり、住居址1・2の検出及び掘り下げを行った。11月24日から再度バックホーを借り上げ、一部残っていた表土の掘り下げを行った。12月4日から第3地点の調査にかかった。同時に第1地点の遺構測量を開始した。12月11日から再度第1地点の精査を行った。12月20日からは第4地点の調査に入り、平成元年の発掘は12月22日に終了した。平成2年は1月8日から開始した。1月9日からは第2地点の調査を行い、1月24日に大崎南土地改良区の受託事業分の発掘調査を終了した。

平成2年1月25日から、国庫補助事業分の第5地点の発掘調査を実施した。バックホーによる表土剥作業は1月16～18日に行っておいた。発掘調査は2月21日に終了したが、測量等を含め、調査の全工程が終了したのは2月28日である。

(註) 内藤秀史「古野故布地 中原遺跡ほか 土地改良総合整備事業に伴う発掘調査」[『岡山県歴史文化財発掘調査報告書』] 岡山県教育委員会1988



第3図 第1～5地点位置図及びグリッド配置図
(S=1:5,000)

III. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

発掘調査主体 津山市教育委員会

教育長	萩原賢二
教育次長	藤田公男
参事兼文化課長	須江尚志
文化係長	轍山三千穂
調査担当	主事 保田義治
整理担当	主事 保田義治
	埋蔵文化財調査員 本村祐子
	埋蔵文化財整理員 野上恭子

発掘作業員 赤松国幹・芦田和子・安東千代乃・片山泰・片山久子

清原可一・清原浩・小林稔代・小林信・下山よし子

竹内節雄・藤島広子・藤嶋雪子・森本憲一（50音順）

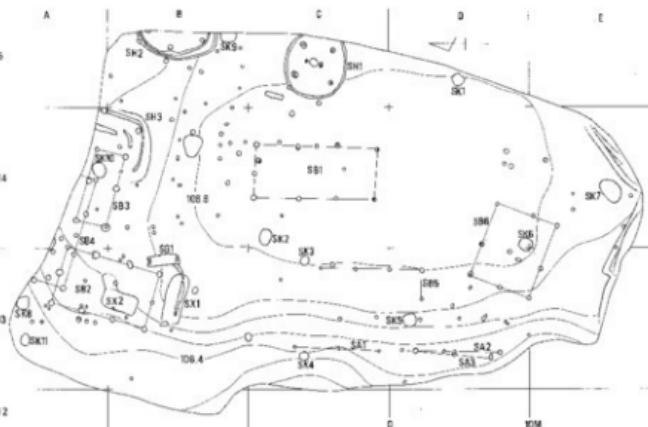
IV. 調査の記録

1. 第1地点

第1地点の概要（第4図） 第1地点はA-E-12-15区にあたり、約870m²を測る調査区である。丘陵先端の頂部にあたり、尾根線は調査区の北東方向へ抜けてゆく。標高は106.3~106.6mを測る。

遺構は所属時期を基準にして大きく3つに分類できる。すなわち、弥生時代に属するもの、中世及び近世に属するもの、そして所属時期の不明なものである。まず、弥生時代に属するものとしては竪穴式住居2、土壙墓1がある。これは調査区の北半分、すなわち、丘陵頂部から東斜面にかけて分布している。次に中世及び近世に属するものとしては建物址6、杭列3、そして不明土壙2が挙げられる。これらは溝堀区のほぼ全域にわたって分布に示している。さらに所属時期不明なものとしては土壙11、住居状遺構1が挙げられる。ただし、土壙5・7号については他の土壙と埋土及び形態等が異なっており、出土遺物もわずかながら認められることから、近世の所産である可能性が強い。また、住居状遺構は須恵器片等が出土していることから、古墳時代の所産である可能性が高い。

住居址1（第5図） 調査区中程の東縁に検出された。径4.2mを測る円形竪穴式住居である。壁体は水田の削平のためほとんど遺存していない。ただ、浅い溝が円形にめぐっていることから、確認されたものである。床面には4基の柱穴が検出された。東側2基の間隔がやや広く260cm、その他の平均は230cmを測る。柱穴は径約50cmであるが、その中に径20cm程度の柱の痕跡が認められた。床面中央には60×50cmの楕円形を呈する中央穴が検出され、その南北両側には径15cmの小ピットが認められた。また、本住居址の東側一部は調査区外にあ

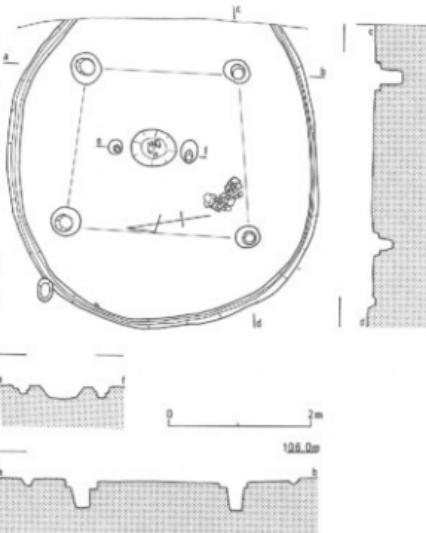


第4図 第1地点全体図 (S=1:400)

り、未調査である。

床面から2ヶ所と中央穴内からまとめて土器が出土した。それを含め図示できる遺物は14点である。(第5図) 2は住居址北西角の壁体溝内から、3・6が住居址内南側から、1が中央穴内から、8は側溝による試掘時に出土したものである。1~3は壺形土器である。口縁部の形態は端面に連続刺突文をもつものと、口縁端部をやや肥厚させ端面に凹線文をもつものとある。

胴部の最大径部はやや上位にあり、外面はタテハケ、内面には指の圧痕と、下半には指によるナデ上げが認められる。また、3には胴部上半に2段にわたって、板状工具による連続刺突文が認められる。4~6は壺形土器である。「く」の字状に外反し、口



第5図 住居址1平・断面図 (S=1:80)

縁端部はやや上方へつまみ上げ、端面には数条の凹線文を施している。内面はタテハケであるが、下半にはヘラケズリも認められる。外面は6ではタテ方向のヘラミガキが認められる。7~9が高杯形土器である。やや内傾気味に立ち上がった口縁部は径16.5cmを測る。杯部の口縁部外面には3条の凹線文がめぐる。屈曲部の上位はタテハケ、下位はタテ方向のヘラミガキであり、屈曲部周辺にはヨコ方向のヘラミガキが認められる。内面は下位がヨコハケで、上位はナデであるが、8にはその際の爪跡が認められる。脚部は緩やかにラッパ状に開き、端部はやや上下に拡張を示している。脚端部径は7で12.6cm、8で11.4cmを測る。筒部の内面はヨコ方向のヘラケズリである。裾部には4方向に穿孔が認められるが、8は円形が1つ、7は円形2つが1組となっている。10は壺形土器の胴部最大径部である。かなり鋭角に屈曲しており、上位に3条の凹線文、下位にはタテハケが認められる。11~14は壺形土器もしくは壺形土器の底部片である。いずれも外面調整はタテ方向のヘラミガキで底部周辺はナデ消されている。内面はタテ方向のヘラケズリの残るものと指による圧痕もしくはナデ上げが認められるものがある。また、14においては底部の外面平坦部分に数回の不定方向のヘラミガキ様の痕跡が確認された。

住居址2(第7図) 調査区の北東隅に円形竪穴式住居の一部が検出された。その範囲は調査区界で5.8m、そこから西へ2mである。ただし、調査区外にある残り推定復元すれば、径約6mを測るものと思われる。壁体溝は床面で2本検出されたことから、本住居においては



第6図 住居址1出土遺物 (S=1:4)

床面もしくは柱穴内埋土からは出土遺物は認められなかったが、住居址の埋土内から数点の土器が出土している。図示できるのは1点である。(第8図)壺形土器もしくは壺形土器の底部片で、底部径4.5cmを測る。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はタケハケで、底部には指頭圧痕が認められる。

住居址1・2ともその形態及び出土遺物からほぼ同時期に営まれていたものと推定される。その所属時期については遺物に明確に示すものがないため、弥生時代中期の所産と大きくとらえておきたい。

土壤墓1（第9図）

調査区のやや北西よりの部分から検出された。側板の長さが230cm、上端幅が平均75cmを測る。両小口には土壙壁体に沿って50×25cmの楕円形に深さ20cm程度の小口溝が検出された。土壙墓の底部はほぼ水平である。また、建物址2に伴うと思われる溝に南側の一部を切られている。出土遺物は認められなかった。

住居状造構1 <SH 3> (第10図) 調査区の北縁に一部検出された。

緩やかな斜面にまず削平を加え、その内側に方形を意識する様に溝をめぐらせている。いずれも西側においては後世の擾乱のため遺存していない。さらに内側に不明瞭な溝が2条確認された。床面は水平にはならず、緩やかに北へ向けて傾斜している。また、柱穴も数基確認されたが、竪穴式住居の如く整然と並ぶものではない。上層断面の観察から建物址3より古いものであることが判明している。

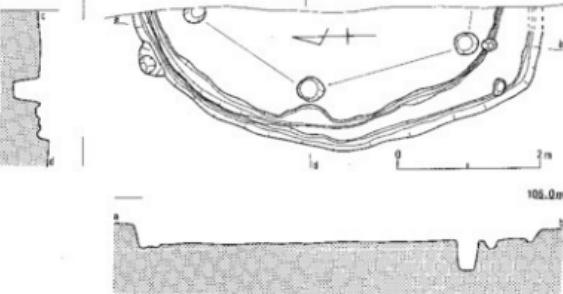
出土遺物は勝間田焼と共に須恵器小片が出土している。また、砥石（第26図の2）も出土している。図示できる土器は1点のみである。（第11図）羽釜の口縁部片であり、径20.4cmを測る。外面には高さ約1cmの凸帯がめぐり、その部分の径は24.5cmを測る。下位には全面ススが付着している。

建物址1（第12図） 調査区のほぼ中央に検出された。1

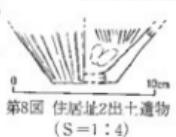
×3間の掘立柱建物である。梁間の北側で3.8m、南側で3.6mを測る。桁行は各柱間にやや不揃いの感があるが東側で8.8m、西側で8.5mを測り、各柱間の平均は2.6mを測る。柱穴径は約30cmを測り、柱穴底部の高さはほぼ揃っている。また、8基中3基に柱痕が確認されている。その径は平均で15cmを測る。本建物址は長軸をほぼ南北に向けている。これは建物址5及び杭列1・2と並行である。

図示できる出土遺物は、東側桁柱で北から2本目の柱穴埋土内から出土した、勝間田焼の楕形土器の底部片がある。（第12図）底部径8.0cmを測り、糸切り底である。

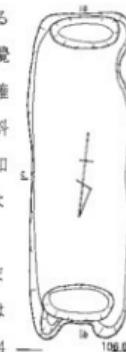
建物址2（第13図） 調査区北西部に検出された2×3間の掘立柱建物である。梁間は4.0



第7図 住居址2平・断面図 (S=1:80)



第8図 住居址2出土物 (S=1:4)

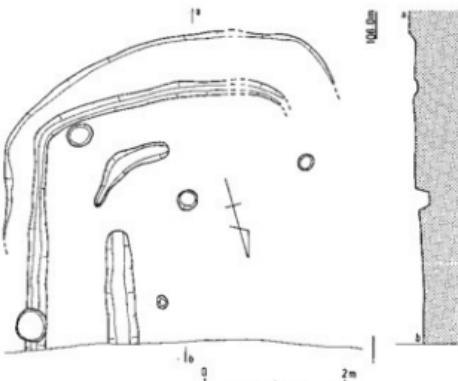


第9図 上塹墓1平・断面図
(S=1:40)

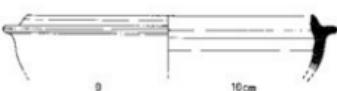
1 黒褐色土
2 喜茶褐色土
3 青黄褐色粘質土

mで、各柱間は平均2.0mである。また、桁行は6.8mで、この各柱間距離は2.3mを測る。柱穴内埋土には焼土及び炭化物が多く含まれており、本建物が焼失したものである可能性が示唆される。柱穴は凹形を呈するものがほとんどで、径は40~50cmを測る。柱穴内には1~2個の小兒頭大の河原石がはいっているものも多い。

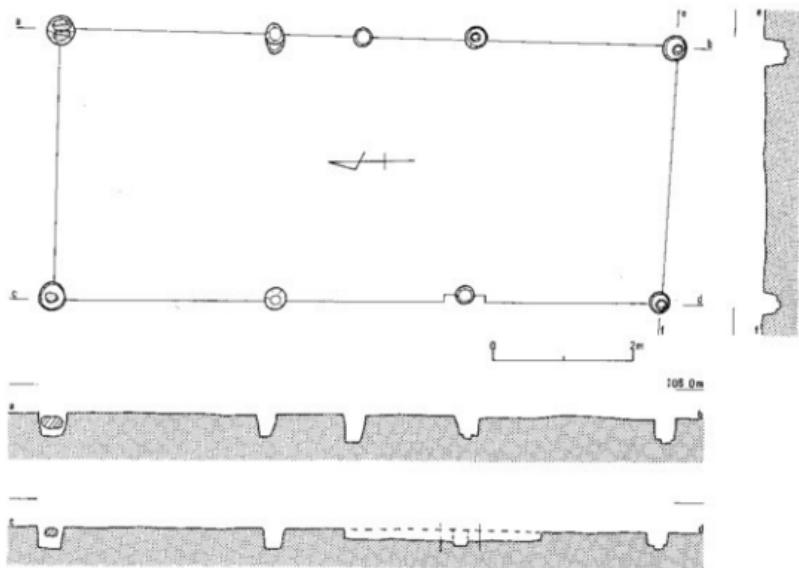
建物址の南側に、梁に並行して焼土及び炭化物が帯状に堆積している部分が認められた。西へ向かっては自然の傾斜によって約3m程で途切れている。それに連続して東側には、北へ向かって、炭化物を多く含む埋土を持った浅い溝が検出された。これも土壤基1と切り合う周辺で途絶えている。この焼土及び炭化物は建物址の梁及び桁の方向と一致し、柱穴内にも焼土及び炭化物が充填されていた事実とも考え合わせ、両者には何らかの関係があるものと思われる。



第10図 住居状遺構1平・断面図 ($S=1:80$)



第11図 住居状遺構出土遺物 ($S=1:4$)



第12図 建物址1平・断面図 ($S=1:80$)



第13図 建物址1出土遺物
(S=1:3)

また、南側に1基の不明土壙が検出された。幅1.4mで長さ3.4m以上を測る。軸が梁と並行であり、前述の焼土等が埋入していたことから、本建物址と何らかの関係を認めることができる。さらに建物址の内側に、前土壙と直行し、建物の軸と並行に主軸を持つ土壙が検出された。焼土等は認められなかったが、これも本建物址と何らかの関係があると考えられる。

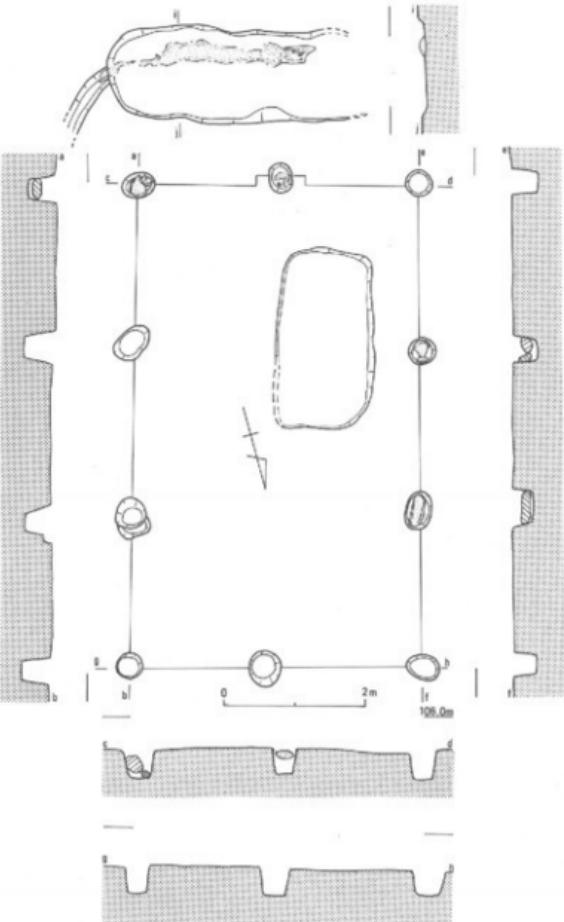
出土遺物で図示できるものは不明土壙2から出土した1点のみである。

(第15図) 羽釜の口縁部であり、口縁部径15.6cmを測り、外面に凸帯がめぐっている。

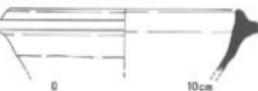
建物址3 (第16図)

調査区の北縁に検出された、1×2間の建物址である。梁間は東側で2.0m、西側で2.3mを測る。軸行は5.3mで、柱間平均距離は2.7mである。主軸は建物址2と直行し、建物4と並行である。柱穴は径35~50cmを測り、底部のレベルはほぼ一定である。柱穴内に河原石の入ったものが1基、柱痕が確認されたものが1基検出された。柱痕の径は約20cmを測る。

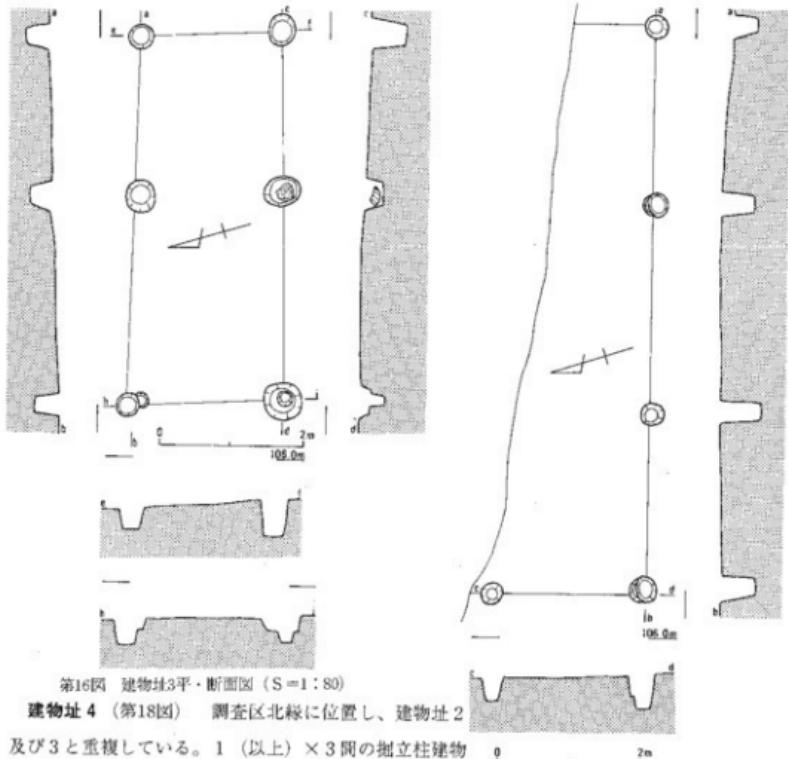
図示できる出土遺物は1点のみで、口縁径21.4cmを測る羽釜片である。(第17図) 他に比べやや内傾しており、内面にはヨコハケ状の調整が認められる。



第14図 建物址2平・断面図 (S=1:80)



第15図 建物址2出土遺物 (S=1:4)



第16図 建物址3平・断面図 (S=1:80)

建物址4 (第18図) 調査区北縁に位置し、建物址2

及び3と重複している。1(以上) × 3間の掘立柱建物

である。調査区外へ対応が伸びる可能性がある。梁間8 第18図 建物址4平・断面図 (S=1:80)
m、桁行2.5m(以上)を測る。柱穴は径約30cmの円形を呈し、柱穴底部のレベルはほぼ揃っている。主軸方向は建物址3と並行であるが、両者は一部重複しているため、同時存在はありえない。しかし、主軸の直行する建物址2及び距離的にやや離れるが建物址6の計4棟は相互に時期的な何らかの関係があるものと考えられる。

図示できる出土遺物はなかった。

建物址5 (第19図) 調査区中央やや西よりに検出された、1(以上) × 3(以上)間の掘立柱建物である。建物址1の主軸に並行にまず東側の桁が杭列として確認され、さらにその南

西部に梁の柱穴が確認されたものである。北から西側にかけて自然地形の傾斜により、建物の正確な規模は判明できなかった。現状では桁行7.3m、梁間2.0mを測る。

第17図 建物址3出土遺物 (S=1:4)

図示できる
遺物はなかっ
た。

建物址 6

(第20図)

調査区の南
側に検出され
た、 2×2 間

の掘立柱建物

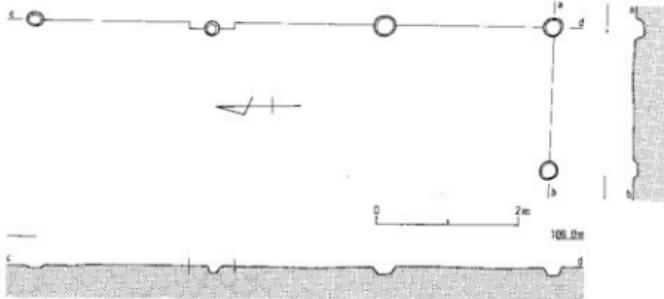
である。梁間4.6m、
桁行5.5mを測る。し
かし、柱間距離はそれ
ぞれ異なっており、最
も長いもので3.3m、
短いもので1.8mを測
る。主軸は建物址 2 に
直行している。柱穴の
径は30~40cmで、円形
のプランをもつ。3基
について柱痕が認め
られ、径が約15cmであ
る。深さはやや不揃い
である。

図示できる出土遺物
は1点である。(第21
図) 勝間田焼の楕形土
器であり、口縁形12.0
cm、器高3.2cm、底部

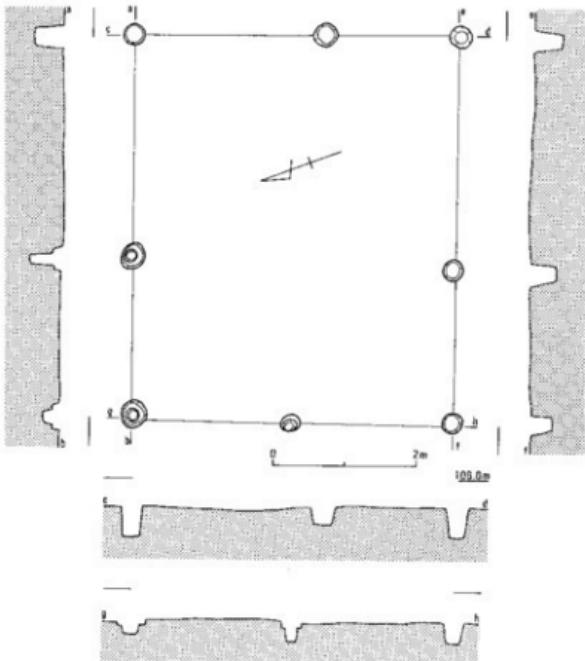
7.4cmを測る。底部は糸切り底で、体部はヨコナデである。

土壤 1~11 (第22図) 調査区全域にわたって11基の土壙が検

出された。埋土は7・9の他は上層(遺構検出時に確認できる)が暗褐色土層で、その下層に黄褐色土層がある点で共通している。7・9は遺構検出時から他とは異なっており、埋土は粘質の強い黄褐色土もしくは灰褐色土層であり、他の土壤とは時期



第19図 建物址5平・断面図 ($S=1:80$)



第20図 建物址6平・断面図 ($S=1:80$)



第21図 勝間田焼の楕形土器 ($S=1:3$)

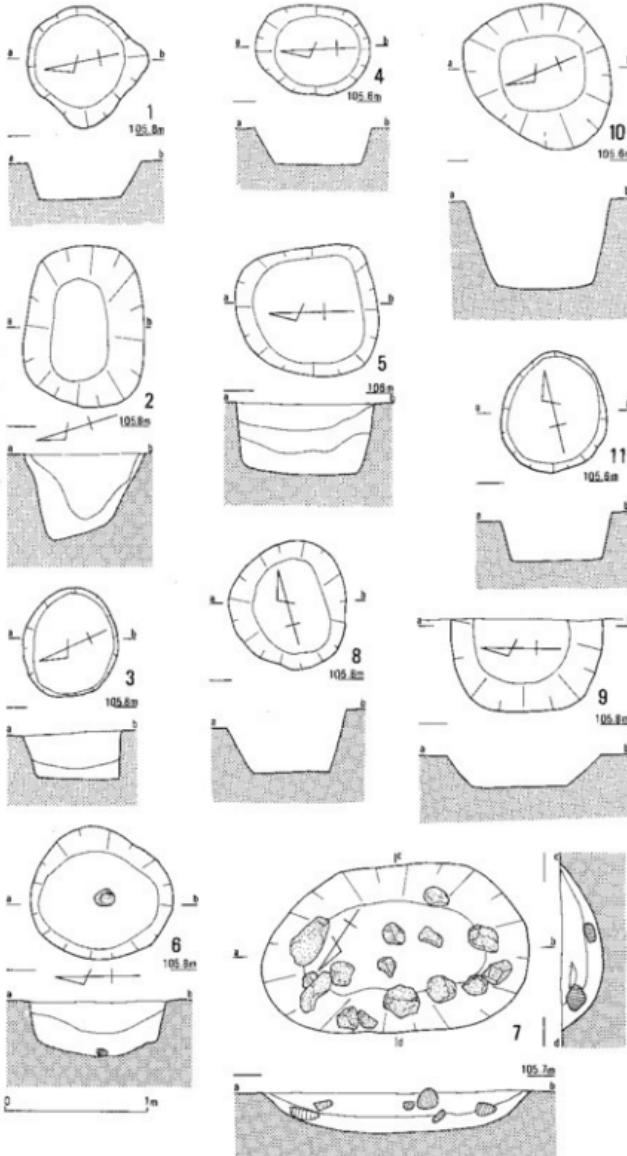
建物址6出土遺物 ($S=1:3$)

的に差異があるものと思われる。

まずは前者の9基の特徴を挙げることにする。

平面形は円形もしくは橢円形のものがほとんどであるが、土壤2・5のように隅丸の長方形もしくは方形ものが認められる。断面形は底部が平坦な台形を呈する。埋土中もしくは底部に小児頭人の縄がはいっているものが多く認められたが、土器等の時期を決定できる遺物は認められなかった。

土壤7は調査区の南端に検出されたもので、長軸が1.8m、短軸が1.2mを測る。断面形は浅い皿状を呈しており、内部には15個の大型の縄が入っていた。図示できる出土遺物には勝間田焼片が1



第22図 土壌1-11平・断面図 (S=1:40)

片（第23図の1）と石鎚（第26図の1）がある。勝間田焼は底部片で、底部径8.0cmを測る。石鎚は3.5×1.5cmの槍先形のサヌカイト製である。内外面ともに精緻な剥離が施され、断面菱形に整形されている。

造構に伴わない遺物（第23図～25図） 第23図の2はC-13区のピットその他の土器（S=1:3）内から出土した小皿である。口縁径7.8cm、底部径5.6cmを測る。

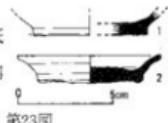
第24図は遊離出土の弥生土器の底部片である。底部径5.7cmを測る。外面はタテ方向のヘラミガキで、底部周辺はナデ消されている。

内面はタテ方向のハケ目調整であり、底部には指頭圧痕が認められる。

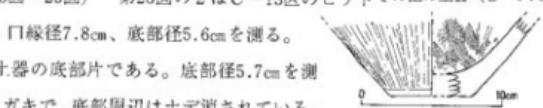
第25図は遊離出土の勝間田焼である。1は蓋形土器片である。2～8は椀形土器であり、糸底状の台部の付くものと付かないものの2者が認められる。いずれも底部は糸切り底である。8は口縁部片であり、口縁部径は16.5cmを測る。9は磁器の底部片である。底部の台部径は5.2cmを測る。

10・11は鉢形土器である。平坦な広い底部をもち、内面には数条のタテの刻み目が認められる。12は土鍋である。口縁部径は30cmを測る。口縁部は「クラシク」状に立ち上がっており、端部はやや肥厚させており、端面はやや内傾している。内面にはヨコ方向のハケ目様の調整が認められる。口縁部は内外面ともナデ仕上げである。

第26図の2は砥石である。住居状造構の埋土中から出土した。長さ14.0cm、幅5.2cm、厚さ3.3cmを測る四角柱で、両側の小口以外の4面全てに研磨面が認められる。重量は398gである。また、1の土壤7から出土した石鎚は混入品と考えられる。



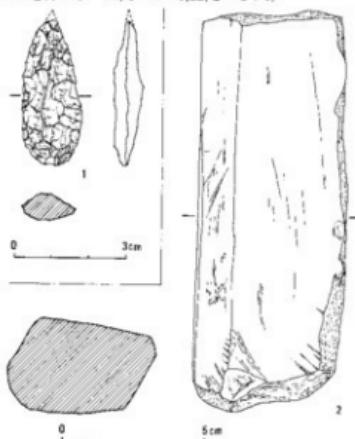
第23図



第24図 造構に伴わない遺物 (S=1:4)



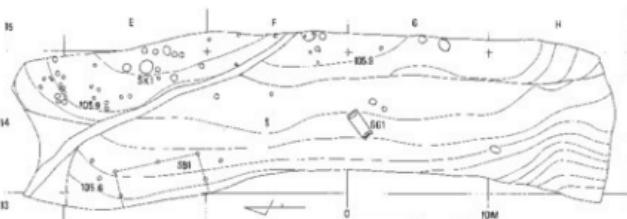
第25図 造構に伴わない遺物2 (1-11, S=1:3; 12, S=1:4)



第26図 第1地点出土石器 (1: S=2:3; 2: S=1:2)

2. 第2地点

第2地点の概要 (第27図) 第2地点はD~H-13~15区にあたり、約390m²の長方形を呈する調査区で、丘陵の頂部から南斜面にかけての部分である。その結果、調査区の南側には深い谷部が位置し、南西方向へ4%の傾斜をもっている。遺構群の立地する標高は105.6~105.9mを測る。

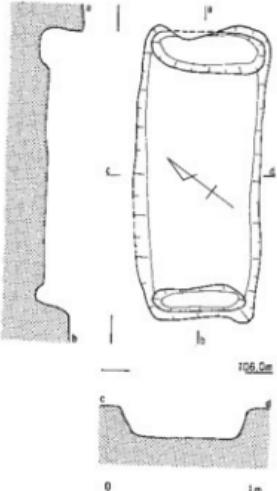


第27図 第2地点全体図 (S=1:400)

遺構には弥生時代の土壙墓1、時期不明の上壙1、建物址1がある。また、調査区の北東部に多数の柱穴が検出されているが、住居址及び建物址に推定されるものは確認できなかった。

土壙墓1 (第28図) 調査区の中央部やや南寄りに検出された。210×90cmを測る。現状での深さは約20cmを測る。両側の小口には小口板を差し込んだものと考えられる小型の溝が確認された。東側は幅30cmで床面からの深さ8cmを測る。西側は幅15cmで床面からの深さ5cmを測る。両小口のさらに外側には、側板を立てたと考えられるわずかな拡張部分が認められた。このことからこの土壙墓の構造は、長い側板に狭まれるように、やや内側に小口板を立てていたものと考えられる。これは本土壙墓のみならず、第1地点の上壙墓1にも認められる事実であり、このことから、両者には時期的な何らかの共通性が認められるものと考えられる。

図示できる出土遺物はないが、弥生土器の破片が数点埋土中から出土している。このことから弥生時代の所産であることは認められるものの、さらに細かな分類を行うことはできなかった。



建物址1 (第29図) 調査区の北西角に検出された。2×1(以上)間の掘立柱建物である。現状での梁間は2.8m以上を測り、柱間距離は1.9mを測る。桁行は5.9mを測り、各柱間距離は平均3.0mである。桁の対岸部分は調査区の西側の外にあるものと考えられる。柱穴は径20cm程度の小さなもので、深さについてはまちまちである。これは上面が水田を造成する際に削平されたため、柱穴の底部付近のみが遺存している結果と考えられる。主軸はやや西側に振った南北を指す。

第28図 上壙墓1平・断面図 (S=1:40)

しており、第1地点の建物址の中で並行関係にあると思われるものは見当らない。

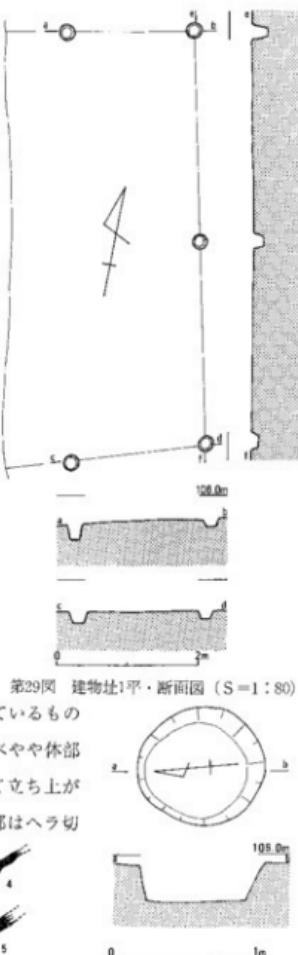
柱穴内埋土からの出土遺物はなかった。

土壤1（第30図） 調査区の北東部に検出された。楕円形を呈し、 $80 \times 90\text{cm}$ を測る。現状での深さは 10cm を測る。埋土中には小児頭大の礫が出土している。また、時期を決定できる遺物は出土していない。

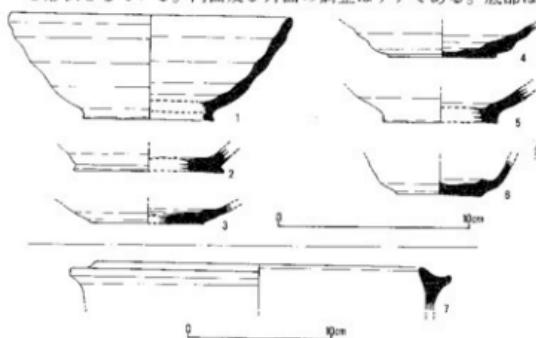
本土壙は形態及び埋土の状態から、第1地点の土壤群の前者と同型のものであると思われる。

造構に伴わない遺物（第31図） 全て遊離出土の遺物である。しかし、いずれも北東部の柱穴群周辺より出土している。

1～6は腰間田焼の楕形土器である。1は糸底状の台が付くものである。口縁部径 15.0cm を測り、底部の台部径は 7.0cm 、器高は 5.5cm を測る。体部の調整は強いヨコナデであり、底部の台は後に取りつけている。2～5はいずれも楕形土器の底部片である。いずれも底部は糸切りであり、同心の放物線状の痕跡が認められる。器形はいずれも鉢形を呈するものと思われる。体部はヨコナデであり、特に底部周辺は強いナデにより、やや外側へはみだす形状になっているものがある。6も腰間田焼の楕形土器の底部であるが、他に比べやや体部が直立するものである。底部径 4.4cm を測り、丸みを持って立ち上がる形状をしている。内面及び外面の調整はナデである。底部はヘラ切



第29図 建物址1平・断面図 (S=1:80)



第31図 造構に伴わない遺物 (1~6: S=1:3.6; S=1:4)

第30図 上横1平・断面図 (S=1:40)
りである。6は羽釜である。

口縁部外側に凸帯がめぐるものので、口縁部径は 24.6cm を測る。凸帯頂部の最大径は 27.0cm を測る。外面にはスヌが付着している。

3. 第3地点

第3地点の概要（第32図） 第3地点はM～0～8～11区にあたり、約390m²の扇形を呈する調査区で、北もしくは北々西に伸びる尾根の先端部から東斜面にかけての部分であり、標高は106.9～107.1mを測る。

遺構は弥生時代後期の竪穴式住居1、中世～近世の所産と考えられる建物址1及び杭列4、所属時期不明の土塙墓1及び土塙2が検出された。また、南角部分から多数の柱穴が検出されたが、住居址もしくは建物址となるものは確認できなかった。

住居址1（第33図） 調査区の北東角にその竪穴式住居の一部を検出した。壁体溝が弧状にめぐり、その内側には住居址の主柱穴と考えられるピットが確認された。径を推定復元すれば約5mの竪穴式住居となるものと思われる。

床面はほとんど削平を受けており、遺物等は埋土中から出土していない。しかし、柱穴埋土中から小片の弥生土器が出土しており、また、周囲からは弥生時代後期の土器のみ出土していることから、本住居の所属時期も弥生時代後期として良いと思われる。

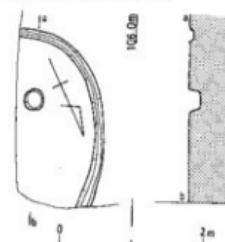
土塙墓1（第34図） 調査区北より東際で検出された。115×75cmを測る方形の土塙である。現状での深さは約10cmを測る。出土遺物には弥生時代の小片が2点あるが、他の土塙墓と形態が異なっていること等から、ここでは所属時期不明とする。

建物址1（第35図） 調査区南側の高所に検出された。径40～50cmを測る柱穴列が並行に4列並んであり、それを建物址1棟として理解したものである。その結果、2×3間の純柱の掘立柱建物となり、その北及び西側に庇をもつものである。梁間は両側とも4.0mを測る。桁行は8.0mを測る。北側と西側の軒と考えられる柱穴はやや浅めで、建物の柱穴とは約60cm隔てて2×3間の整然と並んでおり、北側で8.6m、西側で4.5mを測る。

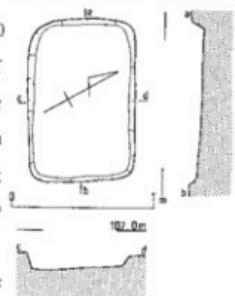
南側桁の東から2つ目の柱穴内埋土から、図示した上部質小量が



第32図 第3地点全体図 (S=1:400)



第33図 住居址1平・断面図 (S=1:80)



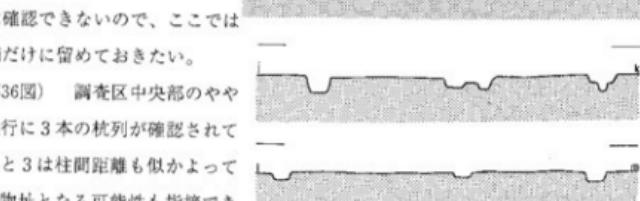
第34図 土塙墓1平・断面図 (S=1:40)

出土した。また、この建物址の確定において若干の疑問が残っている。すなわち、各柱間距離の違いや、軒柱設定の困難等から建物址2軒もしくは数本の杭列になる可能性が指摘できることである。

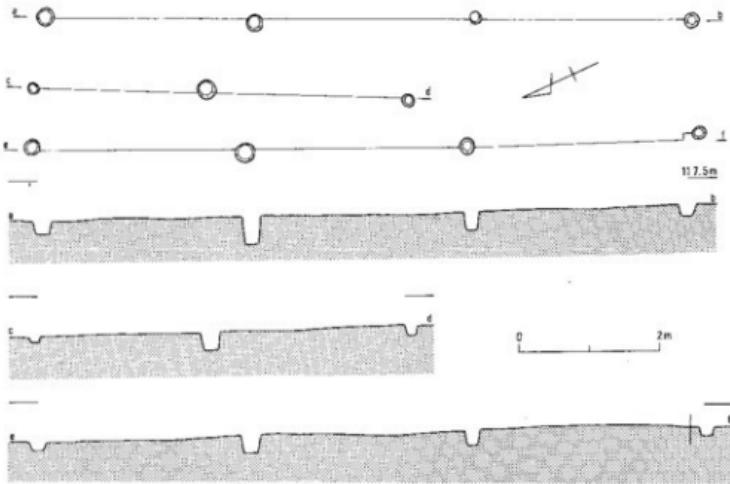
これはもう少し全体的

把握をしなくては確認できないので、ここではその可能性の指摘だけに留めておきたい。

杭列1～3（第36図）調査区中央部のやや東側よりにはほぼ並行に3本の杭列が確認されている。特にSA1と3は柱間距離も似かよっているため1棟の建物址となる可能性も指摘できる。いずれも等高線に対して直行しており、建物1及び杭列4に対しても直行している。杭列1は東側のもので、4本の柱穴が並び、柱間平均距離は約300cmを測る。杭列2は1・3に対してやや東に振っており、3本の柱穴が並ぶもので、柱間平均距離が260cmを測る。杭列3は杭列1の西側190cmの位置に方向を一致して検出されており、4本の柱穴が並んでいる。柱間平均距離は約290cmである。いずれも柱穴も深さについてはまちまちであり、柱穴底のレベルも様々である。但し、低所即ち北側へ向かうほど浅くなる傾向は認められる。



第35図 建物1平・断面図及び出土遺物
(S=1:80, S=2:3)



第36図 杭列1~3平・断面図 (S=1:80)

出土遺物で図示できるものはないが、柱穴埋土中及びその周辺部より勝間田焼の小片が出土しているので、本遺構の所属時期もその当該時期と考えられる。

杭列4 (第37図) 杭列1~3の北側で、調査区の北縁に位置する。柱穴3基による杭列である。柱間距離は平均210cmを測る。上部が削平されているためか、柱穴の深さはかなり浅いものとなっている。丘陵の先端部から東側へなだらかに傾斜してゆく所に位置し、その部分では等高線に直行するものの、尾根線に対しても直行している。北側調査区外に及ぶ建物址となる可能性も指摘できる。

図示できる出土遺物はないものの、周辺部からは勝間田焼が出土しているので、本遺構も当該時期のものと推定される。

杭列については他にも数ヶ所可能性のある部分が認められるが、いずれも明確なものではないので、ここでは割愛する。

土壙1 (第38図) 調査区北東部で、土壙墓1の西側に位置する。70×50cmの方形を呈するもので、現状での深さは約30cmを測る。出土遺物はないため、所属時期等は不明である。

土壙2 (第39図) 調査区北側で杭列4の南側に検出された。「陥し穴」といわれる土壙である。90×65cmを測り、やや隅丸の方形を呈している。深さは現状で約40cmを測る。土壙底部には徑15cm、深さ15cmの柱穴状のピットが確認されている。出土遺物はないが、所属時期はその形態特徴の共通性等から縄文時代の所産である可能性が



第37図 杭列4平・断面図 (S=1:80)

高い

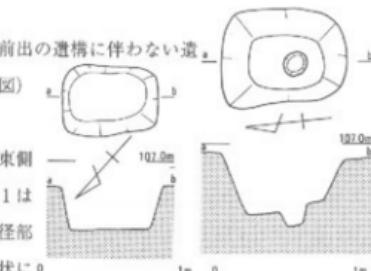
遺構に伴わない遺物（第40・41図） いずれも前出の遺構に伴わない遺物である。図示できたのは弥生土器が3点（第40図）と勝間田焼が5点（第41図）である。

第40図は弥生時代後期の土器である。1・2は東側角の柱穴群の1つから一括出土したものである。1は壺形土器の上半部である。径23cmを測る胴部最大径部から頸部13cmの径にまで急激に収束し、「く」の字状に外反し、更に上方やや外側に立ち上がって口縁部に至る形態を呈している。口縁部径は16cmを測る。二重口縁状になる部分の外面には稜が形成されており、調整はナデで仕上げられている。胴部外面はタテハケ、内面はヨコ方向のヘラケズリである。2は壺形土器の底部片である。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はタテハケの後、指によるナデ上げである。

1の特徴から、この遺物の所属時期は大田十二社遺跡の編年（註1）に当てはめると、3期に該当するものと思われる。

第41図は勝間田焼である。1～3は壺形土器である。1は口縁部径が14.2cmを測り、底部径は8.4cmを測る。器高は4.4cmである。2・3の破片についてもほぼ同形態である。4は台付壺形土器の底部片である。台部は粘土紐状のものを後から作り付けられている。径は6cmを測る。1～4はいずれも体部は水引き状のヨコナデ、底部は糸切り底である。5は壺形土器の口縁部である。緩やかに外反し、端部はやや肥厚し丸くおさめている。口縁部径は27cmを測る。

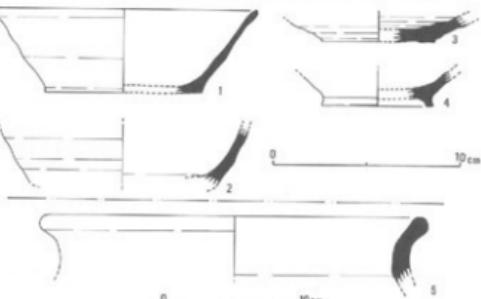
（註1）中山俊紀他「大田十二社遺跡」「津山市埋蔵文化財発掘調査報告書10集」津山市教育委員会1981。



第38図 土壤1平・断面図 (S=1:40) 左
第39図 土壤2平・断面図 (S=1:40) 右



第40図 遺構に伴わない遺物1 (S=1:4)

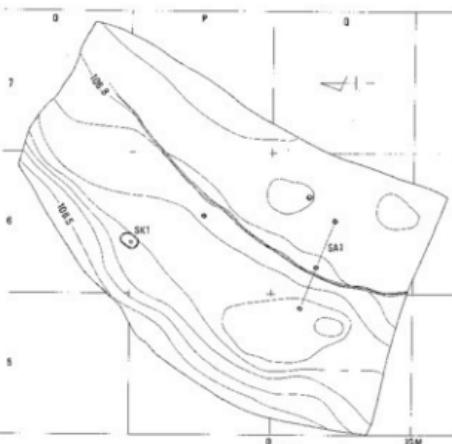


第41図 第3地点出土遺物2 (1-4; S=1:3.5; S=1:4)

4. 第4地点

第4地点の概要（第42図） 第4地点はO-Q-5-7区にあたり、約470m²の長方形を呈する調査区で、北東方向へ伸びる尾根の先端部にある。標高は106.5-106.8mを測る。第3地点と同一丘陵上であり、調査区の南側で、第5地点との間に1つの谷があるものと思われる。

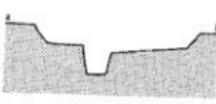
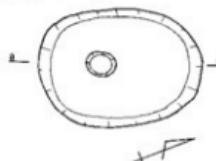
遺構は「陥し穴」といわれる土壌1と、杭列1が検出されているのみである。これは地山上部が水田を作る際にかなり削平されており、ある程度深さのある遺構しか遺存していないためと考えられる。また、上位の包含層中からは中世～近世の土器片が2袋程度出土している。



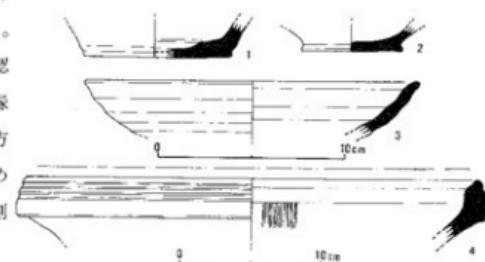
第42図 第4地点全体図 (S=1:400)

土壌1（第43図） 調査区の中央やや西よりに検出された。「陥し穴」といわれる土壌である。115×85cmを測る楕円形を呈したもので、現状での深さは約15cmである。土壌底部のやや南よりに径15cmを測る柱穴状のピットが検出された。その深さは土壌底部から約20cmを測る。出土遺物はないが、所属時期はその形態特徴の共通性等から縄文時代の所産である可能性が高い。

遺構に伴わない遺物（第44図） いずれも上位の包含層中から出土した勝間田焼の破片である。1は楕形土器の底部片である。糸切り底の径8cmを測る底部から直立気味に上方へ立ち上がっている。2と3は楕形土器である。2では底部径5.4cm、3では口縁部径18cmを測る。体部には水引き状の強いヨコナデが認められる。4は鉢形土器である。口縁部径33.6cmを測る。口縁部はやや上方へ拡張し、端面に四線様の加飾が認められる。内面には数条のタテ方向の刻みが認められる。



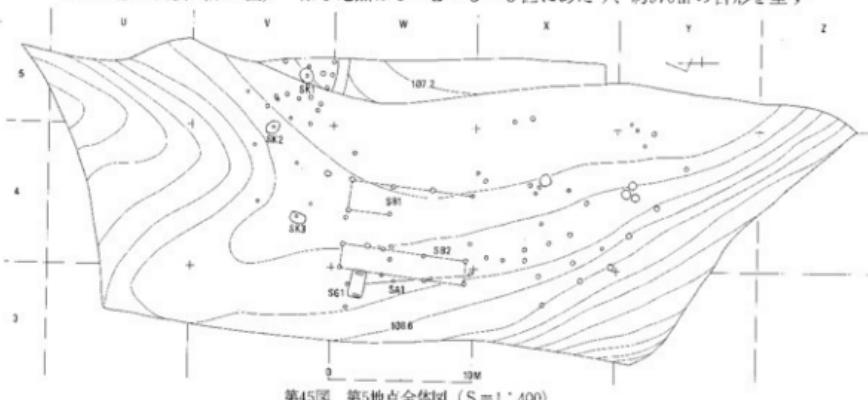
第43図 土壌1平・断面図 (S=1:400)



第44図 遺構に伴わない遺物 (1-3; S=1:3; 4; S=1:4)

5. 第5地点

第5地点の概要 (第45図) 第5地点はT~Z-3~5区にあたり、約970m²の台形を呈す



第45図 第5地点全体図 (S=1:400)

る調査区で南に伸びる丘陵部の先端にあたる。そのため、南北両側には深い谷部がありこんどおり、実質調査面積は710m²を測る。遺構の検出された標高は106.5~107.2mである。

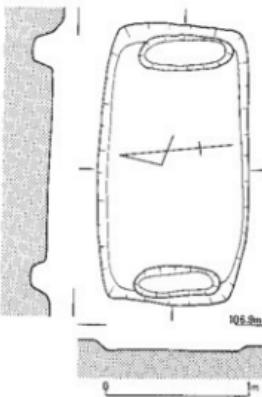
遺構は弥生時代の土壙墓1、中世もしくは近世に属する建物址2、杭列1及び所属時期不明の「陥し穴」といわれる土壙3が検出されている。また、調査区の北東部及び南西部に多数の柱穴群が検出されたが、住居址もしくは建物址に確定することはできなかった。

土壙墓1 (第46図) 調査区中央やや西側に検出された。

200×110cmを測る。上面が水田造成の際に削られており、現状での本土壙墓の深さは約5cmとなっている。両小口には小口板を立てたと考えられる小溝が検出された。幅約20cm、長さは60~65cm、深さは10~15cmを測る。主軸はほぼ東西に向いており、等高線の走向に直行している。

本土壙墓の小口溝の埋土内から弥生土器1点が出土している。(第47図) これは壺形土器の口縁部片であり、口縁部径14.6cmを測る。「く」の字状に外反し、口縁端部はわずかに上方へつまみ上げている。口縁部の調整はナデである。形態から弥生時代中期に属するものと考えられる。

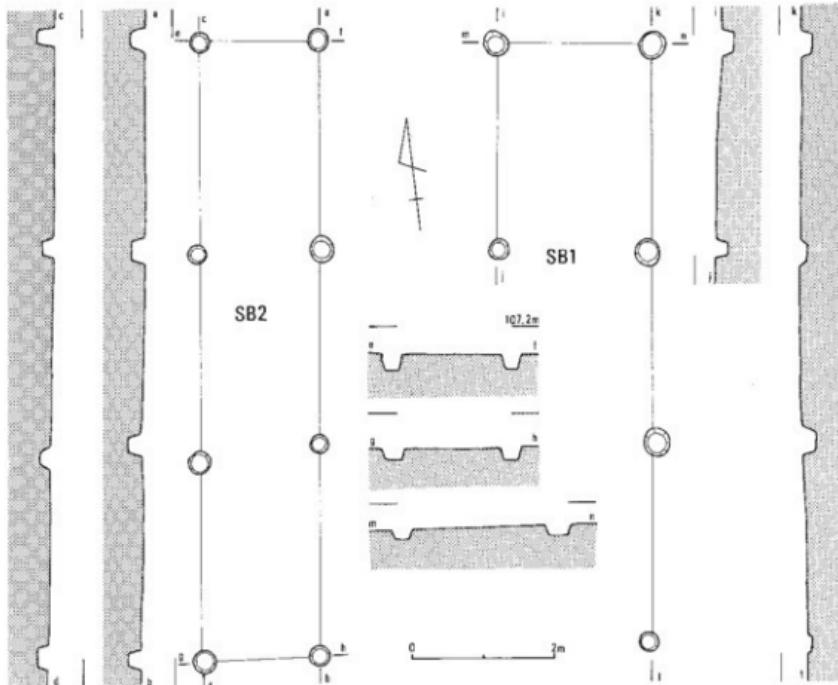
建物址1・2 (第48図) 調査区のほぼ中央部に検出された。同一の主軸をもつ2棟が、約2.4m離れて並んで検出されたものである。東側を建物址1、西側を建物址2とする。



第46図 土壙墓1平・断面図 (S=1:40)



第47図 土壙墓1出土遺物 (S=1:4)



第48図 建物址1・2平・断面図 (S=1:80)

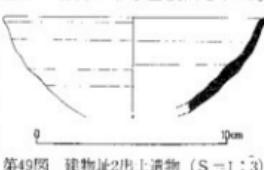
建物址1は 1×3 間で、西側桁の南側2基の柱穴は自然傾斜のため失われている。梁間220cmで桁行840cmを測る。柱穴は径約30cmで、深さは15~20cmを測る。建物址2は 1×3 間で、梁間180cm、桁行880cmを測る。柱穴径は約30cmで深さはいずれも浅いものである。両建物とも柱穴が浅くなっているが、これは水田造成の際の削平のためと考えられる。

2軒の建物址が相並んで位置しているが、同時に存在していた確証は得られなかった。

図示できる出土遺物には、建物址2の東側桁下から2つ目の柱穴埋土中より出土した勝岡田焼片がある。(第49図) これは楕円形土器であり、口縁部径16.0cmを測る。体部の調整は水引き状の強いヨコナデである。

土壤1~3 (第50図) 「陥し穴」と呼ばれる土壤で、調査区の北側から3基検出された。

土壤1は調査区北西部に検出されたもので、 110×90 cmを測る、楕円形のものである。現状での深さは40cmを測る。底部の中央には径20cmの柱穴状のピットがあり、深さ25cmである。出土遺物はなかった。土壤2は土壤1と3の間に検出さ



第49図 建物址2出土遺物 (S=1:3)

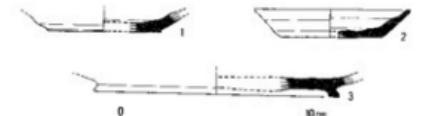
れたもので、 $110 \times 82\text{cm}$ の椭円形のものである。深さは 45cm を測る。底部中央に径 25cm の浅い凹みがあり、深さは 7cm を測る。出土遺物はなかった。土壌3は調査区中央やや北側に検出されたもので、隅丸方形のプランをもち、 $105 \times 70\text{cm}$ で、深さ 18cm を測る。底部には柱穴状ピットがあり、径 20cm 、深さ 20cm を測る。出土遺物はなかった。

杭列1 建物址2に重複し、主軸をやや西にふった状態で検出された、柱穴4基からなる杭列である。全長 8.7m を測る。出土遺物はない。建物址になる可能性も指摘できるが、東側は自然の傾斜のため、対応する柱穴等は検出されなかった。

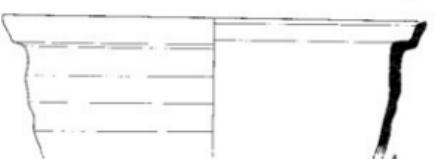
遺構に伴わない遺物（第51図） 全て遊離出土の遺物である。ただし、ほとんどが調査区の北東部の柱穴群周辺より出土している。

1~3は勝間田焼である。1は楕形土器の底部である。底部は糸切りである。2は小皿である。口縁部径 8.0cm 、器高 1.5cm を測る。3はやや大型盤の底部片である。底部の台の径は 13cm を測る。底部は台を付けた後、ナデている。

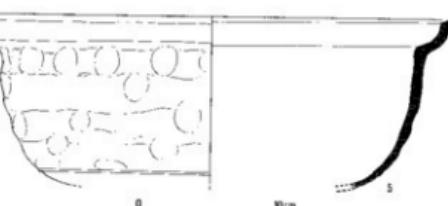
4・5は上鍋である。4は口縁部径 30.2cm を測る。やや丸みのない体部から口縁部は「クランク」状に立ち上がっている。5は口縁部径



34.0cmを測る。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部はやや内傾気味になっており、「クランク」部はかなり鋭角になっている。

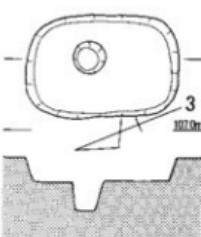
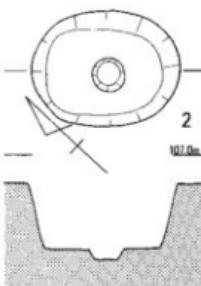
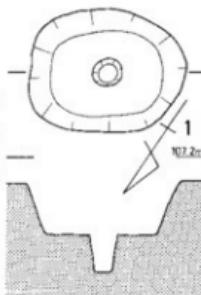


第50図 土壙1~3平・断面図
(S = 1 : 40)



外反気味に「クランク」状に立ち上がっている。いずれも口縁部はやや内傾気味になっており、「クランク」部はかなり鋭角になっている。口縁部調整は内外面ともナデである。体部もナデ仕上げであるが、部分的に指頭圧痕が認められる。また外面にはかなりススの付着が認められる。

第51図 遺構に伴わない遺物 (1~3, S = 1 : 3, 4・5, S = 2 : 3)



V. まとめ

1. 弥生時代の集落について

弥生時代の集落は第1地点と第3地点に検出されている。それぞれについてまとめておきたい。

まず、第1地点においては竪穴式住居址2軒が中心になっている。SH1からはかなりまとまった出土遺物があり、これについてまず時期をおさえておきたい。対象なる土器は高杯形土器である。これは押入西遺跡の1号住居址出土の土器（註1）に類例がある。この報告によれば、弥生時代中期の中葉から後葉の所産と考えることができる。また、稼山遺跡の溝8（註2）の一括遺物に照らし合わせても、壺形土器等の共伴関係においても矛盾のないことから、所属時期は前述の通りであるものと考えられる。

統いて、第3地点は検出された住居址は1軒であるが、遺物の出土状況等から、南から南東方向にかけて遺構の遺存している可能性が高い。但し、調査区の南東部分は上面がかなり削平を受けており、ピット群が検出されたものの、住居址と認定することはできなかった。遺物でまとまって出土しているものには、南東部のピット内一括のものがある。壺形土器においては口縁部が2重口縁状になっており、やや外反している点や、内面のハラケズリが屈曲部にまで及んでいる点から、大田十二社遺跡の縄年（註3）によると第3式に対応するものと思われ、他の底部片もそれに矛盾しない。

ここで注目すべきは、弥生時代の中期と後期においては丘陵を異にして立地している点である。このことは、各地点において、決して中期と後期の土器が混じって出土していない事実によって裏付けられる。このような現状（事実）は中原の平野を挟んで位置する津山中核工業団地内の遺跡群においても認められる。例えば、一貫西遺跡（註4）と一貫東遺跡（註5）とは1つの谷を挟んだ相並んで位置する丘陵のそれぞれに立地しているが、一貫西遺跡においては中期の集落、一貫東遺跡においては後期の集落が営まられており、決して両者が混在することはない。同様に事例は、同じ津山中核工業団地内の遺跡群においては、中期の別所谷遺跡（註6）、金井別所遺跡（註7）、深田河内遺跡（註8）、崩レ塚遺跡（註9）、茶山古墳群内の弥生遺跡（註10）等があり、後期の大畠遺跡（註11）、小原遺跡（註12）等がある。但し、津山市草加部においては状況をやや異にしており（註13）、この現象（事実）が当地特有のものであるかどうかについては、今後の課題として残しておきたい。

2. 建物群について

掘立柱建物址は第4地点を除いて各地点に検出されている。

第1地点においては6軒の建物址が検出されている。主軸の方向から2者に分類することができる。まずはSB1・5・SA1・2による建物である。これは建物間の距離から同時存在の可能性がある。次にSB2・3・4・6による建物である。これはSB2・3とSB4が切りあっているため、SB2とSB3が同時存在していたとすれば最低2時期に分離することができる。よって、第1地点においては最低3時期にわたって建物群が立地していたものと思われるが、出土遺物が少ないため詳細な所属時期等は不明である。

第5地点において2軒の建物址が検出されており、1間×3間の東西の長い建物が2軒並んで位置している。また、第3地点においては建物址は1棟のみ検出されているが、このSB1は2棟以上の建物址となる可能性がある。1棟として推定した場合、2間×3間の総柱の建物で、北側と西側に庇を持つ形態をとる。その際、中軸の柱列がやや南側に寄っている。また、2棟以上とする場合、多くの組み合わせ方が可能となり、判断し難いものとなる。但し、柱列の南側の2列は、第5地点の建物址と形態及び規模が非常に似通っている。そのことから、これを1棟とすることができるかもしれない。更には、第3地点においてSA1とSA3と報告したものについても、同様の理由で1棟の建物址になる可能性がある。しかし、いずれも埋土に差異はなく、また、出土遺物等も判然としないため、ここではその可能性の指摘のみに留めておきたい。

- (註1) 井上弘他「押入西遺跡」『中国縦貫自動車道に伴う発掘調査1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(3)岡山県教育委員会 1973
- (註2) 村上幸雄「稼山遺跡群1集落遺跡編」『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979
- (註3) 中山俊紀「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会 1981
- (註4) 行田裕美「一貢西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会 1990
- (註5) 津山市教育委員会が昭和60年度に発掘調査を実施。報告書未刊
- (註6) 津山市教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施。報告書未刊
- (註7) 保田義治他「金井別所遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集』中国電力株式会社新津山変電所発掘調査委員会・津山市教育委員会 1988
- (註8) 保田義治「深田河内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集』津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1988
- (註9) 保田義治「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集』津山市埋蔵文化開発公社・津山市教育委員会 1989
- (註10) 保田義治「茶山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集』津山市教育委員会 1989
- (註11) 津山市教育委員会が昭和61~62年度に発掘調査を実施。報告書未刊
- (註12) 津山市教育委員会が昭和61~62年度に発掘調査を実施。報告書未刊

図版 1



第1地点全景（南から）



第1地点、住居址1



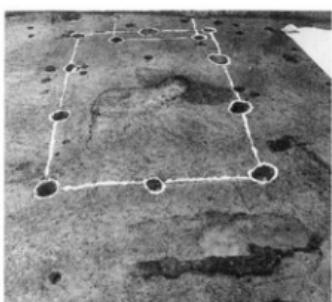
第1地点、住居址2



第1地点、住居状遺構

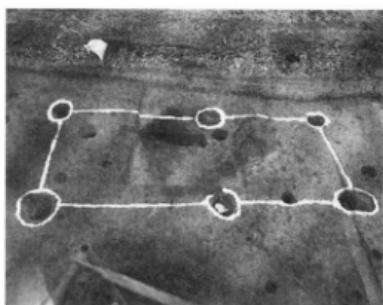


第1地点、建物址1

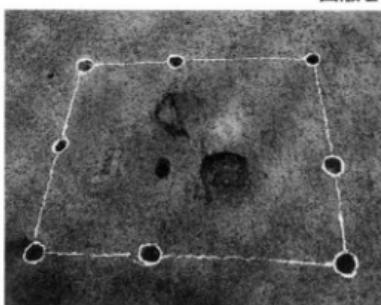


第1地点、建物址2

図版2



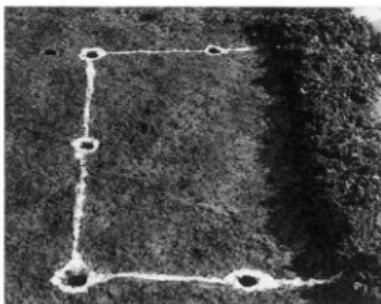
第1地点、建物址4



第1地点、建物址6



第2地点全景（北から）



第2地点、建物址1

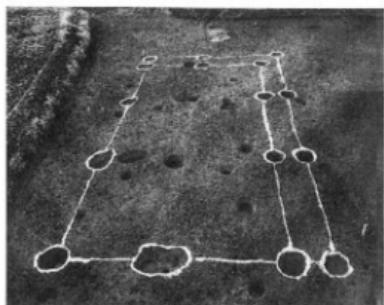


第3地点全景（北から）



第3地点、住居址1

図版3



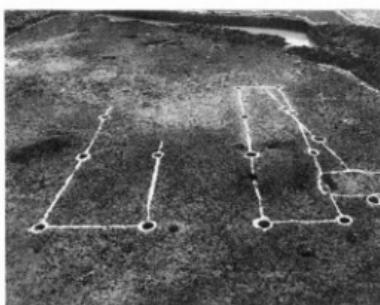
第3地点、建物址1



第4地点全景（北から）



第5地点全景（北から）



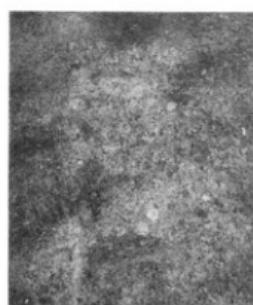
第5地点、建物址1・2、杭列1



第1地点、土壤墓1

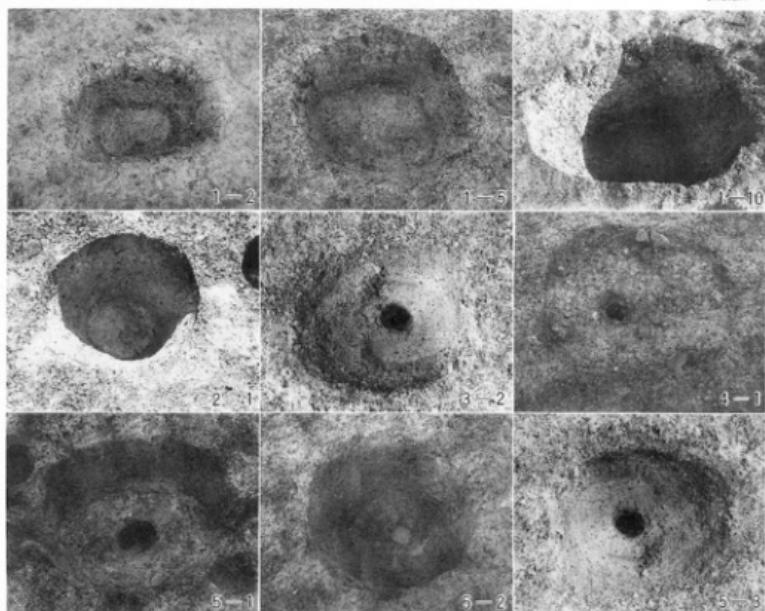


第2地点、土壤墓1



第5地点、土壤墓1

図版4



土壤（数字は、団面番号—遺構番号）



出土遺物（数字は、団面番号—遺物番号）

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第37集

中原遺跡

大崎南土地改良区は場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

1990年3月31日 発行

発行 津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印刷 株式会社 廣尾本社
岡山県津山市田町22